

明治大学国際交流基金事業 研究者交流支援制度 報告書

加藤言人

明治大学政治経済学部専任講師

2024 年 7 月 15 日

実施概要

- ホスト教員：加藤言人（明治大学政治経済学部専任講師）
- 訪問研究者：Fan Lu（Assistant Professor, Department of Political Studies, Queen's University, Canada）
- プログラム期間：2024年6月29日～2024年7月5日

実施詳細

本プログラムでは、クイーンズ大学（カナダ）で Assistant Professor を務める Fan Lu 博士を訪問研究者として招聘し、特別講演および研究交流を行いました。Fan Lu 博士は、エモリー大学（アメリカ）で経済学学士号、カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）で政治学博士号を取得し、2020 年からクイーンズ大学に加わりました。大学では、比較政治学及びジェンダーと政治について、特に民族と移民の視点から講義・研究を行っています。また、カナダ社会科学人文研究所（SSHRC）の助成を得た非白人カナダ人の民族理解に関する研究プロジェクト（2023-2028）の研究代表者の 1 人でもあります。これまで研究成果を、Politics, Groups & Identities, Social Science Quarterly, International Journal of Public Opinion Research などの国際査読学術誌から出版してきており、本プログラムにおける特別講演の内容は、現在進行中の書籍企画を基にするものです。

特別講演は、プログラム期間中、2024 年 7 月 2 日（火）の 10:00-12:00 に、明治大学駿河台キャンパスリバティタワー 1125 教室で行われました（ 1）。会場ではホスト教員が

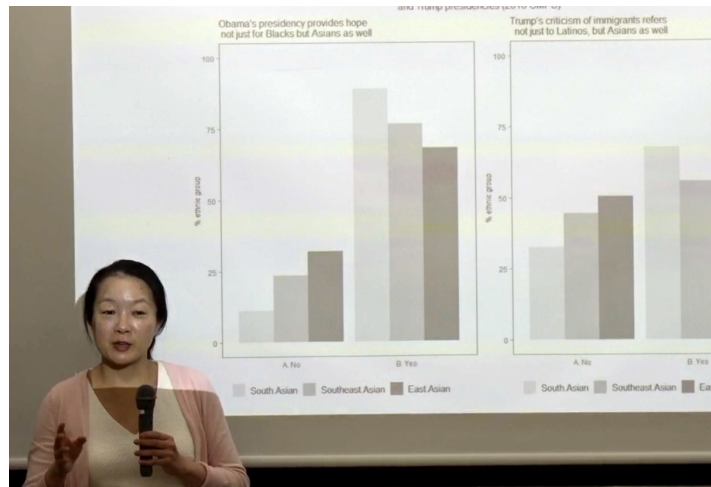


図1 特別講演風景

担当する政治過程論受講生を含めた 15 人の参加者があり、また録画された講義内容はオンデマンド講義として、ホスト教員である加藤言人ゼミナールの学生に共有されました。講演では、Solidarity, Conflict, and the Space in Between: Political Relations between Asians, Blacks, and Latinos in the U.S. (連帯、対立、そしてそのあいだ：アメリカのアジア人、黒人、ラテンアメリカ人グループ間における政治関係) と題して、アメリカにおける民族マイノリティグループ間における政治的対立および連帯の可能性について、Fan Lu 博士が行っている実証的研究の成果が紹介されました。特別講演の内容は、アジア系アメリカ人という特定の対象を超えて、日本人としてどのように多様化する社会へ臨むのかという問題にも、大きな示唆があるものでした。以下では、その内容について概要を紹介します。

Lu 博士はまず、アメリカ政治の文脈において、アジア系（特に韓国系）アメリカ人と、黒人の間に象徴的な政治的対立が生じてきた歴史を説明しました。最近では、2020 年、黒人であるジョージ・フロイドが白人警察官によって窒息死させられた事件において、モン族（東南アジアに住む少数民族）出身の警官が、同僚の白人警官の行動を止めなかった（もしくは助長した）例が挙げられますが、それに限らず、1980–90 年代に遡って、アジア系（特に韓国系）アメリカ人と黒人の間に深刻な政治的対立が生じた事例が見られることが紹介されました。しかし、Lu 博士は、このようなマイノリティ間対立の事例は、歴史の一側面でしかないことを指摘します。アメリカの他の場所・時点においては、アジア系アメリカ人と黒人が連帯する（少なくとも対立が生じていない）ような事例も多数存在するということです。そして、対立と連帯は二項対立によって捉えられるべきではなく、程

度問題として「そのあいだ」が存在するということが指摘されました。

上記の問題関心を踏まえて、アジア系アメリカ人の政治意識に関する実証研究の成果が紹介されました。具体的には、National Asian American Survey (NAAS) と Collaborative Multiracial Post-Election Survey (CMPS) という 2 つの大規模世論調査データを用いた分析結果から、アジア系アメリカ人の他のマイノリティグループに対して保持する認識・態度が考察されました。それによれば、アジア系アメリカ人は、黒人やラテン系アメリカ人に対する民族差別がアジア系アメリカ人に対する差別よりも概して深刻であると認識しており、アジア系と黒人・ラテン系の間に共通の政治的利害があると感じている人が多いことが明らかになりました。

実証分析では、アジア系アメリカ人は必ずしも他のマイノリティ・グループと敵対しているわけではないことが示されましたが、アジア系アメリカ人は、黒人やラテン系アメリカ人と連帯した行動を取っているとは言い難いような事例も多くあります。特別講演の後半では、アメリカにおける、書類なき／不法移民、アフーマティブ・アクション、Black Lives Matter 運動、およびフランス・カナダ・日本における事例をアジア系住民の視点から紹介しながら、なぜ民族マイノリティ間の連帯が実現しないのか、またどうすればそれが実現可能なのかについて検討が行われました。その中では、アジア系と他のマイノリティグループ間で共通の利害が発生している状況が多くみられる一方で、多くの場合、アジア系住民は自民族グループ外の事象へ無関心であったことなどが議論されました。Lu 博士はまとめとして、アジア系住民が、自分たち自身に対する民族差別だけでなく黒人やラテンアメリカ人に対する差別を、また、実利な利害だけでなく黒人やラテンアメリカ人と共通するアイデンティティに基づく利害を認識していれば、連帯の可能なはずであると指摘しました。

特別講演に加えて、ホスト教員が担当する政治過程論の学生は、事前学習として論文を 1 つ読んで講義内で解説し、特別講演直前の 1 時間を使って、Lu 博士とディスカッションをする機会を持ちました。学生にとって最新の研究に触れる機会があっただけではなく、Lu 博士の研究関心が（日本を含めた）アジア系住民の政治意識にあるということで、日本という地で生の学生の声を聞けたことは、今後の研究を展開する上でも非常に有意義な時間になりました。ディスカッションの中では、アメリカにおいて民族マイノリティや女性であるということが選挙において不利であるという認識が、それらの候補者をさらに不利にさせている可能性について、日本における類似事例を学生に考えてもらいながら、積極的な意見交換が行われました。

さらに、加藤言人ゼミナールの学生は、ゼミナール内で日系アメリカ人に関する論文（Lu 博士による論文を含む）を読んで事前学習し、また特別講演後には事後学習として横



図2 加藤言人ゼミナールによる海外移住資料館訪問時の展示風景



図3 Lu 博士の滞在先および研究ミーティング場所の吉祥寺にて、ホスト教員の加藤言人と

浜にある海外移住資料館を訪問しました（図2）。学生にとっては、海外に住む日系人の歴史・現状に触れたことがあまりない人も多く、非常に有意義な学びの時間になりました。訪問後には、ゼミ内で、「日系アメリカ人の歴史・現状について高校教科書に載せるべき内容」という趣旨でグループ・ディスカッションを行い、学んだ知識がもつ意味・可能性について考察を深める機会を持ちました。学生のリアクション・エッセイについてはLu博士と共有し、これもまた日本人の立場からの感想・意見を知るという意味で、有意義な機会となりました。

最後に、ホスト教員である加藤言人と Fan Lu は、共同研究プロジェクトについて集中的なミーティングを行う機会を、Lu 博士滞在先の吉祥寺にて、プログラム中に複数回持

ちました（図 3）。具体的には、Lu 博士とホスト教員の共同で進めている研究プロジェクトが、明治大学による 2024 年度「国際共同研究プロジェクト支援事業」に採択されたため、秋以降にその予算を用いて行うオンライン世論調査の内容について、実質的かつ生産的な話し合いを行うことができました。本機会を提供して頂いた明治大学国際連携事務室には、深く御礼を申し上げると同時に、本学で行われる研究・教育を進める上で非常に有意義な機会であったことを申し添えたいと思います。